

第2章 平成18年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他に年に1～2回の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、また学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。その他にも、学内外のニーズに応じ、随時展示解説会や出前授業などを行っている。

平成18年度は、展示・公開活動として、常設展『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』、第22回企画展『吉田遺跡発掘調査速報展2006』を開催した。さらに資料館展示室以外での展示活動として、吉田構内総合図書館入退館ゲート前にて『大学情報機構埋蔵文化財特別展』を、山口大学吉田地区大学祭「姫山祭」でのイベントとして図書館2階閲覧室にて『幕末期の吉田キャンパス』を開催した。また平成17年度より再開した資料館広報誌『埋蔵文化財資料館通信 たらこや埋文』を季刊で発行した。

社会教育活動としては、山口大学教育学部との共催により第6回公開授業『古代人の知恵に挑戦！—古代のお米をつくってみよう—』を開催した。この他、山口市立平川小学校の依頼により、6年生児童の集団展示見学を受け入れ、火起こし体験等を実施した。

国立大学法人化後、大学に蓄積されている学術知識・資料を広く社会に還元することを目的とした地域連携・社会貢献活動がより強く求められている。当館は学内有数の小組織ではあるが、昭和63年以降継続して展示活動及び社会教育活動を展開している。「地域に開かれた大学」を小規模ではあるが具現化し続けたその誇りを胸に、今後とも社会の要求を適切に判断し、内容ある活動を行う所存である。

表11 埋蔵文化財資料館利用者の推移

| 年度 | 平成7 | 平成8 | 平成9 | 平成10 | 平成11 | 平成12 | 平成13 | 平成14 | 平成15 | 平成16 | 平成17 | 平成18 |
|-------|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|
| 利用者総数 | 355 | 267 | 191 | 200 | 516 | 142 | 555 | 573 | 913 | 669 | 808 | 1,157 |

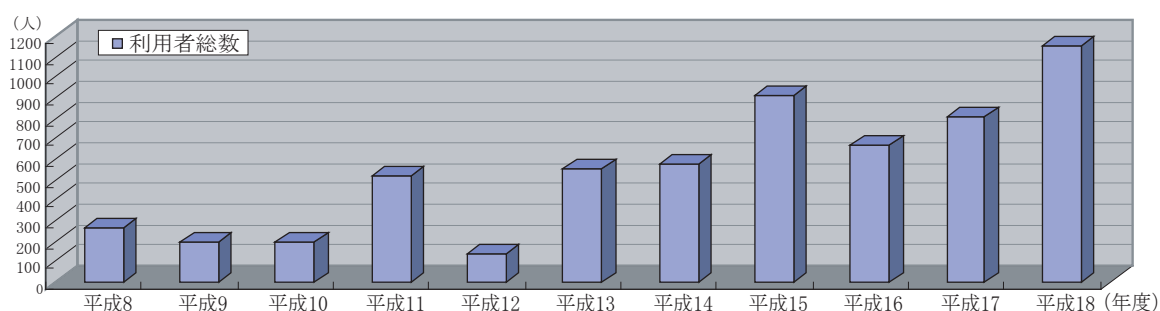
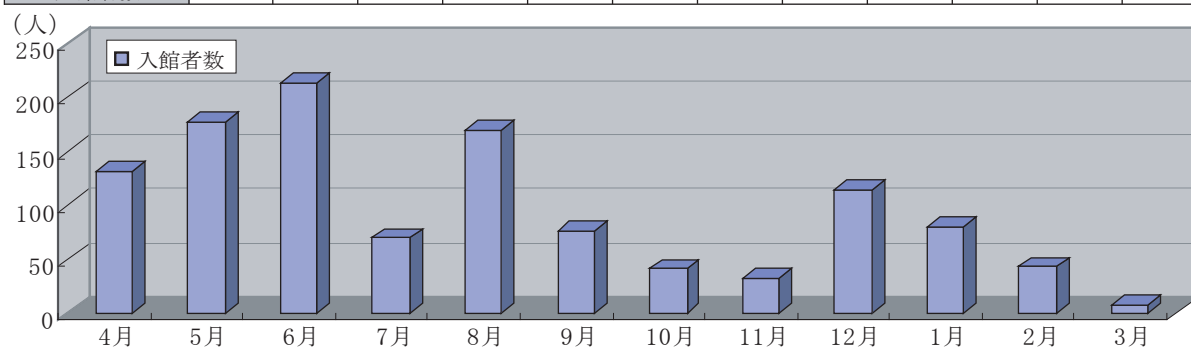


表12 平成18年度月別入館者数

| 月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|------|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 入館者数 | 132 | 178 | 214 | 70 | 170 | 76 | 41 | 32 | 114 | 80 | 43 | 7 |



第1節 資料館における展示公開活動

平成18年度常設展『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』を開催

平成18年度の常設展示として、山口大学吉田構内（山口市吉田）が所在する吉田遺跡を素材に『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』を開催した。吉田遺跡の発見は古く、昭和初期に遡る。現在の大学敷地周辺が棚田を中心とした一面の田畑であった当時、しばしば土器や石器などが発見されていた。これらの出土品は現在山口県立山口博物館および山口市歴史民俗資料館等に収蔵されているが、この地で最初に調査の鍬が入られたのは昭和42年（1967）のことである。各地に散在していた山口大学の各学部の吉田地区への統合移転に先立ち、前年から開始されたキャンパスの造成工事や建物建設工事中に多量の土器や石器が発見されたことを受け、学長を団長とし学内外の関係学問分野の研究者を調査員とした「山口大学吉田遺跡調査団」が結成された。調査団による発掘は統合移転が完了した昭和48年(1973)に一応の終了を見たが、キャンパスのほぼ全域に埋蔵文化財が遺存する状況を鑑み、以後諸開発計画に対する埋蔵文化財保護業務を計画的に実施するため埋蔵文化財資料館が設立された。

本学による40年におよぶ継続的な調査により、吉田遺跡は旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が埋存する県内でも有数の複合遺跡であることが確認されている。今回は、各時代を代表する資料を選定し、「時代の変化にともなう土地活用の変遷」を主題に展示構成をおこなった。

4月3日から9月29日までの開催期間中、881名の入館者を迎えた。多くの方から展示内容につきご好評をいただき一方で、アンケート調査により新入生ばかりでなく大多数の本学生が吉田キャンパスを遺跡地として認識していない状況が浮かび上がった。この調査結果は、本学地下に眠る貴重な学術資料を学生の教育・研究に対して十分に活用できていない事実を表すものとする。当館の展示公開活動の方針を策定する上で、広報形態の見直しなど改善を図ってきたい。



写真148 平成18年度常設展ポスター



写真149 平成18年度常設展図録



写真150 平成18年度常設展の様相①



写真151 平成18年度常設展の様相②

第22回企画展『吉田遺跡発掘調査速報展2006』を開催

本年度は、本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡にて2件の本発掘調査を実施した。各々の調査成果については、本書所収の通りいずれも吉田遺跡の性格把握ばかりでなく地域史研究上極めて重要な資料が多数出土したため、即時的な公開が必要と判断し、調査速報展を開催した。

展示内容としては、吉田構内教育総合研究センターⅡ期工事に伴う発掘調査出土品（主として弥生時代から古墳時代にかけての土器資料）と、吉田構内農学部附属家畜病院（現：動物医療センター）改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査出土品（主として飛鳥時代から奈良時代にかけての土器資料と木製品）を中心に、過去に吉田遺跡から出土した関連資料を用い、該当時期の吉田遺跡の集落構造の復元等を行った。また、発掘調査の記録映像を上映し、実際の遺跡の様子とともに発掘調査の手法を公開した。

平成18年11月20日から平成19年3月2日の開催期間中、276名の入館者を迎えることができた。アンケート調査によると、印象に残った展示物としては「奈良時代の柱」との回答が最も多く、その他の木製品も注目を集めていた。これらの資料は出土直後のため水漬け状態で公開を行ったが、その状況がかえって「生の埋蔵文化財」という印象を強めたようである。また、発掘調査風景の動画公開は、遺跡を身近に感じることができるコンテンツとして概ね好評であった。

当館の性格上、即時性のある埋蔵文化財資料の公開を計画的に行うことは困難であるが、発掘調査成果を常に発信し続ける工夫が必要という思いを強める結果となった。

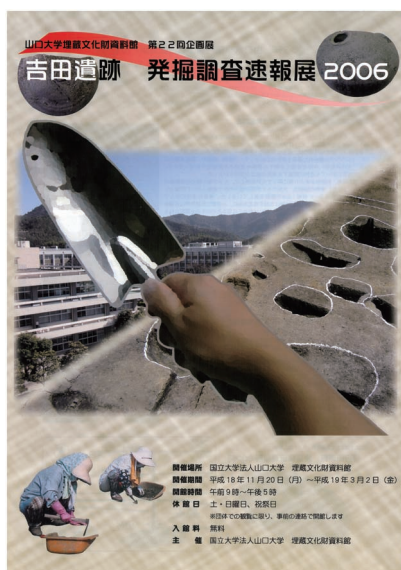


写真 152 第 22 回企画展ポスター



写真 153 第 22 回企画展の様相①



写真 154 第 22 回企画展の様相②



写真 155 第 22 回企画展の様相③

第2回～第4回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

当展示は、平成17年度より本学吉田キャンパス総合図書館入退館ゲート前にて「学術情報機構埋蔵文化財特別展示」という名称で開始したものであるが、平成18年度の組織名変更に伴い展示名を「大学情報機構埋蔵文化財特別展示」とした。

第2回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『山口県遺跡めぐりシリーズ1 ジーコンボ古墳群』

平成18年4月3日から6月30日の期間で開催した。ジーコンボ古墳群は、山口県萩市の北方約40kmの日本海中に位置する見島に所在する古代の墳墓遺跡であり、国の指定史跡となっている。当館は山口県内の著名遺跡出土資料を多数所蔵しているが、昭和35年（1960）から昭和37年（1962）にかけて「見島総合学術調査」の一環として実施されたジーコンボ古墳群発掘調査出土資料も部分的に収蔵している。今回の展示では、古墳の築造時期を知る上で貴重な土器資料とともに、鉄製武器類、刀装具、腰帯飾りなどを公開した。

第3回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『山口県遺跡めぐりシリーズ2 美濃ヶ浜遺跡』

平成18年7月3日から11月3日の期間で開催した。美濃ヶ浜遺跡は、山口市の南端部、秋穂二島地区に所在する遺跡である。遺跡の発見は古く大正14年（1925）に遡る。当時は山口県初の縄文土器発見地として考古学界にその名をとどろかせた美濃ヶ浜遺跡であるが、その後長期間放置され、追加調査が実施されることはなかった。その状況が一変したのは昭和35年（1960）に「山口県美濃ヶ浜遺跡学術調査団」により実施された発掘調査である。この調査において古墳時代の住居跡とともに県内初の製塩炉が発見されたため、製塩遺跡として再評価されるに至った。また同時に多数出土した製塩土器は「美濃ヶ浜式土器」という名称が付され、その後の山口県製塩土器研究の基礎資料となっている。当館は昭和35年調査時に出土した資料の一部を所蔵しているが、今回の展示では実物の製塩土器とともに土器製塩模型を配し、当時の製塩方法の解説を行った。その他、子持勾玉、石製模造品「盾」、紡錘車などの滑石製品も公開した。

第4回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『あしもとの遺跡シリーズ2 古墳時代の吉田遺跡』

平成18年11月6日から平成19年3月30日の期間で開催した。本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡は、姫山・今山から派生した低丘陵部にあたる東地区と、沖積平地である西地区に大きく区分される。古墳時代前期の集落は、弥生時代に引き続き沖積平地部に形成されるが、その後低丘陵部に移動することが確認されており、後期に至ると丘陵部に古墳が築造されたものと推測される。今回の展示では、土器資料とともに滑石製模造品、円筒埴輪片などを公開し、吉田遺跡の古墳時代における土地活用の変遷を解説した。



写真 156 第3回埋蔵文化財特別展の様



写真 157 第4回埋蔵文化財特別展の様

姫山祭にて『幕末期の吉田キャンパス展』を開催

昨年度より、当館とメディア基盤センター、図書館で組織される大学情報機構は、姫山祭（吉田キャンパス大学祭）にイベント参加を行っている。本年度も引き続き姫山祭（平成18年12月2日開催）にて「大学情報機構2006」と題する各組織の特徴を生かしたイベントを開催した。

当館の今回の企画は、図書館のイベント展示『オープンライブラリー2006 長州ファイブ』に合わせ、長州五傑（井上馨、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤博文、井上勝）が活躍した時期の吉田キャンパスの歴史景観の復元を目的に、総合図書館2階一般閲覧室にて『幕末期の吉田キャンパス展』を開催した。

近世以降の現吉田キャンパス所在地の状況については、近世文書および絵図、さらには山口大学移転前、昭和40年頃に撮影された航空写真などにより、丘陵部には棚田が、平地部には比較的区画の大きい水田が設けられ、集落は現在の大学本部から共通教育棟周辺、農学部附属農場建物南側の2ヶ所に数軒からなる小規模集落が存在し続けていたものと推定される。当館が実施している吉田キャンパス内での発掘調査においても、大学本部周辺からは室町時代から江戸時代以降まで存続する建物跡が確認されており、キャンパス各地において各時期の水田用水路、暗渠等が検出されるなど、諸史料の示す状況を裏付けている。

イベントでは、土師器、瓦質土器、陶磁器などの実物展示とともに、現在の吉田キャンパスと近世末期の環境との対比展示を行った。本年度の姫山祭が例年よりも1ヶ月遅い開催であり、悪天候も重なったためか、参加者は極めて疎らであった。当館のイベントコーナーへも、総合図書館まで暖を求めに来た人々がついでに立ち寄りといった状況であったが、足を止めて熱心に見学する方も多く見られた。「大学祭」という華やいだ雰囲気の中でどのように学術資料展示を行うか、その目的も含めて今後の検討課題となるであろう。

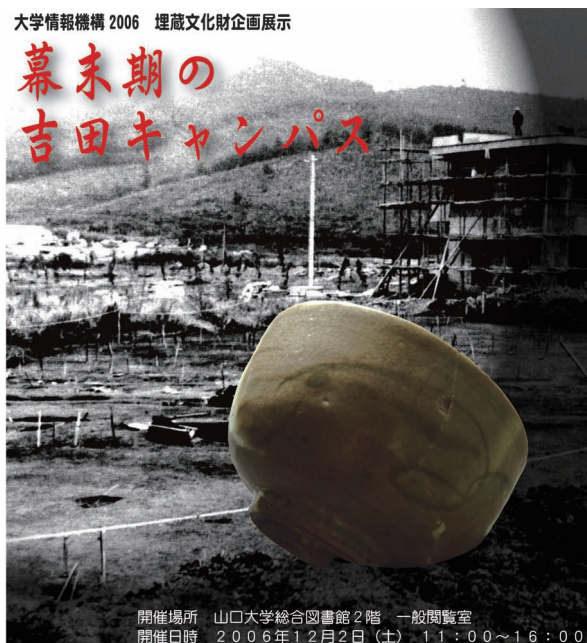


写真 158 展示ポスター



写真 159 展示の様①



写真 160 展示の様②

第2節 資料館における社会貢献活動

第6回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－』を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第6回目となる平成18年度の公開授業は日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回の公開授業は山口大学教育学部と共催で、山口市大内御堀管内にある山口大学教育学部実習農場で延べ5回に渡って行い、小学生4人、保護者・一般11人と教育学部学生に参加していただいた。以下で授業内容を報告する。

5月27日（土）－田植え－

あいにくの雨の中、教育学部の徳永技術専門職員に代かきをしていただいた約53㎡の水田に豊作を願いつつ心を込めて田植えを行った。

6月24日（土）、8月26日（土）－草取り－

稲の成長は予想以上に早く、6月24日には長さ約40cm、8月26日には約100cmに成長していた。また、成長具合がまちまちであることも観察できた。昨年まで畑だったためか、水田にはほとんど雑草が生えなかったが、畦には雑草が生い茂っており、参加者全員で協力して除草を行った。

10月7日（土）－収穫－

稲は9月17日の台風13号でかなり倒れてしまったが、秋晴れの晴天の中、無事に収穫を迎えることができた。最終的に稲は長さ約120cmにまで成長した。収穫には参加者が製作した木包丁などを使って穂摘みをし、残りは鎌で根刈りをしてはぜ架けをした。

10月21日（土）－脱穀・粳すり、赤米を食べる－

前回同様、秋晴れの晴天の中、公開授業最終日を迎えることができた。昭和30年代頃まで行われていた足踏み脱穀機による脱穀や唐箕による選別を体験した後、箸こぎ、臼と杵による粳すり、てみとザルによる選別を体験した。この作業は大変手間がかかったが、手分けして根気強く行った。なお、今回のお米の収穫量は玄米で約10kgであった。台風の影響もあり、収穫量は現在のお米の約1/3にとどまった。お昼には土器や羽釜で赤米入りご飯を炊いたほか、ヤマメの塩焼きや猪鍋をつくった。赤米は現在のお米よりもやや硬かったものの、ほのかに甘い味であった。ヤマメの塩焼きや猪鍋も大変美味しく大好評であった。

公開授業を終えて

今回の公開授業について、参加者からは「楽しかった」「お米を食べるまでにどれだけ大変かよくわかりました」「簡単にものが食べられる時代こそ、こういう体験は大切と思いました」「もみがらをむくのが大変だった」などの声が寄せられた。参加者の皆様には、実際体験することによって楽しんでいただくとともに、米作りの歴史や大変さ、お米の大切さを感じていただき、自分なりの発見をしていただくことができたと感じている。受講者はじめ、教育学部の関係者など多くの方々に支えられて、盛況のうちに公開授業を終了することができ、館員一同心より御礼申し上げたい。なお、平成19年度も今年度の授業内容を踏まえて、赤米をつくる公開授業を行うこととなった。



写真161 田植え (5月27日)



写真162 除草 (6月24日)



写真163 稲の観察 (8月26日)



写真164 穂摘み (10月7日)



写真165 籾すり (10月21日)



写真166 土器による炊飯 (10月21日)



写真167 食事の様相(10月21日)



写真168 参加者の皆さん (10月21日)

山口市立平川小学校児童による集団見学

平成18年5月中旬、山口市立平川小学校より当館への集団見学の依頼があった。本学吉田キャンパスは山口市平川地区に所在しており、平成15年度以降山口市立平川小学校より継続的に同様の依頼が寄せられている。今年度は6年生児童による集団見学の依頼であったが、同小学校は山口県内でも最大規模の児童数を誇るマンモス校であることから、5月29日、6月1日、6月5日の3回に分散して来館いただくよう調整した。それでも各回が50名以上の集団となるため、展示見学と火おこし体験の2グループに分割し、交互に解説と体験学習を実施した。

展示見学については、当館展示室で開催中の常設展『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』の説明を行った。この展示は吉田遺跡の旧石器時代から江戸時代までを通史的に解説したものであるが、6年生児童は現在奈良時代を学習中とのことであり、やはりそれまでに学習した時代（弥生時代から奈良時代）の出土資料に興味を示していた。また館員の立ち会いの下、実際に出土品に触れてもらう試みは非常に好評であった。

火おこし体験は、当館が平成17年度に実施した公開授業「古代人に挑戦！ー弥生土器をつくってみよう2ー」から取り入れた体験学習である。道具（舞きり式）の数に限りがあるため、3人程度のグループに分かれてもらい実施した。約30分という短い時間であったが、全児童が火おこしに夢中になっていた。

平川地区は遺跡が密に分布している地域であるが、それはあくまでも私たち埋蔵文化財調査に携わる者の認識である。児童は自分たちの生活空間の地下に貴重な歴史資料が眠っているという事実を新鮮な驚きとして受け止めているようであった。今後とも内容ある地域連携活動を実施していきたい。



写真 169 火おこし体験の様①



写真 170 火おこし体験の様②

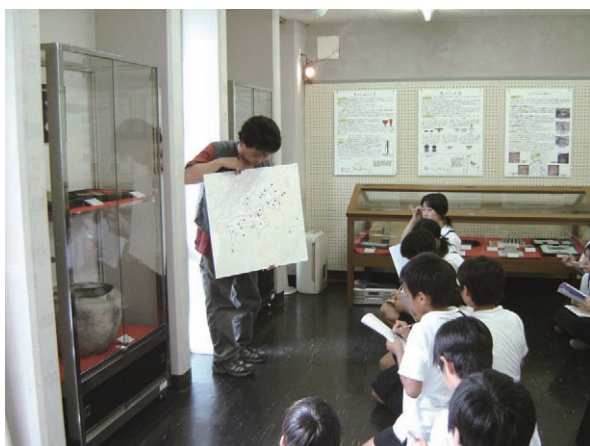


写真 171 展示見学の様①



写真 172 展示見学の様②